

Title	御伽草子『小敦盛』の形成をめぐって
Sub Title	
Author	佐谷, 眞木人(Saya, Makito)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1993
Jtitle	三田國文 No.18 (1993. 6) ,p.42- 51
JaLC DOI	10.14991/002.19930600-0042
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19930600-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

御伽草子『小敦盛』の形成をめぐる

佐谷眞木人

御伽草子『小敦盛』は、『平家物語』の中でも有名な、熊谷直実が平敦盛を討った話（流布本では巻第九「敦盛最期」）の後日譚である。討たれた敦盛には遺児が居たとして、その成長後を描くこの作品は、元になった『平家』の世界から大きく逸脱し、独特の作品世界を構築している。このような特異な作品がいかにして形成されてきたかについては、これまでにもさまざまな考察が加えられてきた。しかし、それらの諸論はなお、この作品の形成過程を十全には解明し得たと言い得ない。本論考もまた、十分なものではないが、その複雑な形成過程を解明するための手掛りとして提起するものである。

一

御伽草子『小敦盛』には、大きく二系統の伝本が存在することが知られている。すなわちその一類は渋川版御伽草子二十三篇中の『小敦盛』とそれに類する系統の伝本であり、いまこれを仮に「御伽文庫本」と呼ぶことにする。また、いま一類はそれより稍長い本文を有する絵巻類であり、いま仮にこれを「絵

巻」と呼ぶ。この二系統の伝本のうち、いずれが先行するかという問題について、早く松本隆信氏に「絵巻」が「御伽文庫本」に先行するとの論考があり、それに対して美濃部重克氏は「御伽文庫本」に近い説経・古浄瑠璃などの語り物がよりよく古態を留めているとする。この問題については後に詳述することにして、ひとまずこの問題を棚上げした上で、他の作品との影響関係から考えていきたい。

そこで、本論に入る前に、『小敦盛』の梗概を確認しておく。大略、以下の如くである。

- ①一の谷の合戦で熊谷直実は平敦盛を討ち、出家して蓮生と名を改め、法然の弟子になる。
- ②敦盛の北の方は男子を出生するが、平家の子孫は殺されたと聞き、さがり松に捨てて。
- ③法然は賀茂社への参詣の帰途、敦盛の遺児を拾い、養育する。

④成長した遺児（若君）は親がいないことを嘆き、瀕死の状態になる。悲しんだ法然が説法場でそのことを語ったところ

ろ、北の方が名乗り出る。

⑤自らの親を知った若君は賀茂社に七日七夜参籠し、申告により津の国生田に赴く。

⑥その地で夢に父の亡霊と対面した若君は遺骨を拾い得て都に戻る。

⑦若君は出家して学問の奥義を究め、西山の善慧上人になる。

以上の梗概は「絵巻」のもので、「御伽文庫本」は①を欠き、また⑦において若君の成人後の名を記さない。それ以外にも細部に異同は見られるが、全体の構成に関するような大きなものではない。

夙に徳江元正氏が指摘しておられる如く、この作品と近似する内容を持つ説話が、『法華経鷲林拾葉抄』巻二十一(薬王品、第二十三)に見える。以下にその該当部分を抜萃する。

一物語云。賀武ノ神主歎テ無子、明神ニ祈誓、女房達ノ中ニ侍従ト云女ニ契テ、令ニ懷妊セ。亭主ノ女房嘆レ之欲レ害シ。而推古天皇ノ御宇ニ以小金菊ヲ重タル文ヲ打就タル御手箱ヲ神殿ニ御寄進有ケリ。彼御手箱懸籠ニ入レ之練貫ノ絹ヲ引韜テ、賀武河ノ辺ニ捨玉ヘリ。宝応元年八月土御門ノ大納言賀武ノ宮ニ通夜ノ曉ト下向シ玉フニ河原ニ少キ者泣ク声シケリ。遣御隨身ヲ、令レ玉ニ見之、返リ参テシカクト申ス。サラハトテ召寄セ自ラ御懷ニ入テ家ニ帰リ養育シ玉ニ之ヲ触事ニ利根也ケレハ、登ニ天台山ニ出家学文シ、無レ程貴僧ニ成玉ヒテ号ニ尊弁僧正ト。三十三ノ時、於ニ嵯峨ノ釋迦堂ニ御説法有ケリ。サテ彼侍従殿ト云女房ハ、捨レ玉ヲ事ヲ悲テ、頓テ

出家シ比丘尼ニ成テ、廻テ諸国ヲ、詣テ靈仏霊社ニ、捨ニシ子ノ後世ヲモ訪ヒ、我カ身ノ二世安楽ヲモ祈玉ヒケルカ、三十三年ト云時、及ニ老期ニケレハ、無レ何ト故郷恋サノ余リニ、指テ都ヲ上玉フ。嵯峨寺ニコソ貴キ人ノ説法有ル由ヲ申テ、道俗群集ニ参リケル程ニ、我モ聴聞申サハヤト思テ嵯峨寺ヲ透ルトテ、

ナ
待ケルヤ今コノ野ヘノ蓬生ニテツカラシケル野辺ノ道カ

サテ御堂ニ参テ御説法聴聞シ玉ヒケルガ、殊勝中ノ申モ愚カ也。御説法終テ諸人皆帰ケレトモ此比丘尼一人僧正ニ尋申度事有トテ留リケリ。即御前ニ参リテ、サテモ不審ノ事有リトテ尋申。僧正ハ何ナル人ノ御子、亦何レノ処ヨリ出玉フ耶。僧正仰云。我ハ無レ父モ無レ母モ捨子ニテ有ケリト如上云。彼尼重テ申テ云ク、加様ノ事ハ末世ノ御物語ニモ成事ニテ、哀其懸籠ヲ見参セ候ハヤト所望申間、聖人取出玉ヘリ。彼比丘尼何トシテカ其迄ハ彼手箱ヲ持タリケン。取出テ合ニ彼懸籠ヲ見玉ヘハ少モチカハス。其ノ時僧正ハ我カ子ニテヲハシケリトテ、名乗合玉ヘリ。真実父モ養父モ于今存生シケレハ、彼僧正ト一所ニ寄合ヒケル、不思議ノ事也。

玉手箱ナカニカケコノナカリセハフタミソロヘテイカ、ア
フヘキ

右の説話が『小敦盛』と内容上共通するのは、捨て子が貴人の賀茂社への参詣の帰途に拾われ、学問をして高僧となる点及び、説法の場に母が現れ、再会する点である。『鷲林拾葉抄』の土御門大納言は『小敦盛』の法然上人に対応する。また、『鷲林

拾葉抄』は、捨て子が手箱の懸籠に入れて捨てられたとするが、『小敦盛』とはほぼ同じ内容を持つ謡曲『生田敦盛』には「さも美しき男子の二歳ばかりなるを尋常にこしらへ、手箱の蓋に入れ、捨て置き候ふを」とあるから、この点も共通するといつてよい。両話の構成は、親子の再会が捨子の成人する前か後かという違いを除けば、細部に至るまで近似しており、そこに何らかの影響関係を想定せざるをえない。

さて、『小敦盛』には、母子が再会する説法の場合が何処であったかが書かれていないが、『鶯林拾葉抄』は嵯峨の釋迦堂（清涼寺）であったとする。永井義憲氏が指摘されているように、清涼寺での母子再会譚は、世阿弥作の謡曲『百万』と共通する。『百万』はおおよそ、以下のような内容である。

大和三芳野の男（ワキ）は、奈良西大寺あたりで拾った子（子方）を連れて、清涼寺の釋迦堂で毎年行なわれる大念仏会に行く。そこで百万という曲舞女（シテ）が物狂いになり、舞踊っている。それを見た子は母であることに気付き、母子は再会する。母は仏の功德を深く喜び、子と共に都に帰る。

『三道・風姿花伝』の記事から、『百万』は先行曲『嵯峨物狂』の改作であり、『嵯峨物狂』は『嵯峨大念仏の女物狂』とも呼ばれていたことが知られている。⁶⁾「嵯峨大念仏」は嵯峨清涼寺の融通大念仏を指す。この念仏会は歴史が古く、明徳二年（一二三九）版の『融通念仏縁起』には以下のように記されている。⁷⁾

清涼寺の融通大念仏は、導御上人上宮太子の御告により、良忍上人の遺風を伝（へ）て、弘安二年に始行し給（ひ）しよ

り以来とし久しく退転なし。毎年三月六日より同じき十五日にいたるまで、洛中辺土の道俗男女雲のごとくにのぞみ星のごとくにつらなりて群集す、是ひとへに鈍根無智の衆生を濟度せしめんがためなり。

この史料は、清涼寺の融通大念仏が、導御上人（一二三三—一三一）により、鎌倉時代後期の弘安二年（一二七九）に始められたと伝えている。さらに、細川涼一氏の指摘にあるように、享祿二年（一五二九）写の大覚寺藏『清涼寺地藏院縁起』⁸⁾は以下のような導御の伝を載せる。

伊賀国服部郷殖松邑の長者広元は、子がいないのを嘆き、春日大明神に祈誓して、己の命と財産とを引き替えに一子を受る。果して、その子が三才の時、疫病のため広元及び一族の者が死に、火災により家財は悉く焼亡する。乞食となった母は、子を春日馬場に捨てて。梅木坊と呼ばれる高僧が大仏に参詣の途路にこの子を拾い、養育する。成長した子は東大寺に登壇、受戒し、そのち法隆寺に移り、聖徳太子の夢告を得て融通念仏を始め、十萬上人と呼ばれる。のち、嵯峨釋迦堂に移った上人はある夜、山に登り、清瀧川のほとりで一人の僧に出会い、生別した母が播磨国にいることを知る。この僧は地藏菩薩の化身であった。播磨国に赴いた上人は印南野で、年老いて盲目となった母と再会する。

この導御の伝もまた、『小敦盛』とよく似ている。梅木坊と法然、春日馬場とさがり松、印南野と毘陽野……と人名・地名を

対応させてゆくと、両者がほぼ同型の説話といつてよい関係にあることが認められる。この三つを整理して比較すると、下の表のようになる。

このように比較してみると、これらは細部においては異同が大きいが、全体の構成としてはほぼ同じであることが、はっきりする。

以上三種の説話は、互いに何らかの影響関係を持ちつつ、しかもそれぞれが独自性を持った説話としての完結性を保持しているところに特徴がある。これらの説話のうち、いずれが最も先行するのかについて、確たる証拠は見出し得ない。しかし、『小敦盛』の成立は現在のところ、謡曲『生田敦盛』が成立した十五世紀後半以前に溯れない。『清涼寺地藏院縁起』は十六世紀前半の写であるが、前述の謡曲『百万』の元になった清涼寺の母子再会譚は十四世紀半ば以前から存在すると考えられるから、この伝承が先行すると考えるのが妥当であろう。

『小敦盛』は『平家物語』という既存の物語に、既存の母子再会譚を變形して結びつけるという形で成立したものと思われる。ではなぜ、『平家物語』の世界に母子再会譚が結びつけられたのか——『小敦盛』はどのような誘因によって形成されたのか——を考えるためには、別な角度からの検証が必要なのである。

二

そこで次に『小敦盛』の独自性について検討を加えることにする。まず、敦盛の遺児が捨てられたという、下松さかまつ（絵巻では

父子再会の場	母子再会の場	成長後	養育者	捨てられた場所	捨てられた理由	出自	作品名
	印南野	東大寺に登り、導御上人になる	南都の梅木坊	春日馬場	母が乞食になった	伊賀国の長者広元の子	清涼寺 地藏院縁起
	嵯峨寺での説法	比叡山に登り、尊弁僧正になる	土御門大納言	賀茂川の辺り	本妻の怒り	賀茂の神主の子	法華経 鷲林拾葉抄
生田・昆陽野	法然の説法	(善恵上人になる)	法然	さがり松	平家の子孫であるため	平敦盛の子	小敦盛

下松^{しもまつ}）について考えてみたい。

この地については市古貞次氏¹⁰、松本隆信氏¹¹ほか諸注、京都市左京区修学院町の一乗寺下松であるとするが、それでよいのではないか。美濃部重克氏は、一乗寺下松では賀茂社への参詣通路として不自然であるとして、紫野今宮の下松ではないかと述べておられるが、それは稍考え過ぎであろう。

私がこのように考えるのは室町時代中期以前に成立したと考えられる法然上人伝の一本、『正源明義抄』¹²に、少年時の法然が仏道修行を思い立って故郷である美作国より比叡山へ赴く途路、さがり松で月輪殿（九条兼実）と出会い、その帰衣を受けたという伝承が見えるためである。以下に該当箇所を摘録すると、

さるほどにさがり松の辺に貴人の御出にまひりあひたまつる。見物の人にとへば当御撰録月輪殿とまふす。いそぎおりて馬引のけさせ、われも木影にたちよりしのびたまふ。殿下児のうしろすがたを御覧じてものみより尺をさしいだし、少童これへきたれと、まねきたまふ。児すこしもはゞからず、御車のまへにまひりたまふ。少童はいづくよりいづくへぞと、とひたまふ。児こたへてはいはく、これは美作国より学文のために、山門へ登候とこたへたまふ。

（中略）

月輪殿、すゝしくこそきこへ候へ。小童にはみこむるところあり。あひかまへて学文こゝろにいれ、大碩学となりて兼実が出家の師匠となりたまへと、御約束ありて殿下は御とをり

あり。（以下略）

（第十二、下松月輪殿御対面事）¹³

ここに見える「さがり松」は、比叡山への登山途路ということを考えるならば、まず一乗寺のさがり松と考えて間違いないと思われる。恐らくこの伝承は、敦盛の遺児が法然に拾われる場所を「下松」とする『小敦盛』と何らかの形で関りを持っているのではないかと私は考えている。というのは、この『正源明義抄』には、他にも『小敦盛』と内容上関連すると思われる部分が見えるからである。

『正源明義抄』巻第九の四 「勢観坊の事」には大略以下のような説話が見える。

平家の武将越前三位通盛は、深く法然に帰依し、出陣に際し「都の近くで討れたと聞いたならば、御弟子をつかわして死骸を拾い、供養してほしい」と頼んでゆく。案の定、一の谷で通盛は討死し、法然の弟子は死骸を発見して火葬し、遺骨を都に持ち帰る。通盛北の方小宰相局は、鳴戸の沖で入水したとのことで、法然は二人の菩提を弔っていると、二月二十一日夜、訪ねてきた女人が一人ある。驚いたことに小宰相局は生きていたのである。法然にかくまわれた小宰相局は、無事に男子を出産するが、産後六十三日めに病没する。法然は遺児を自分の子として育て、遺児は成人して勢観法師（源智）となる。死に臨んで法然は、勢観に実の父母を教え、父母の遺骨を渡す。

この話も『小敦盛』に非常によく似ている。勢観坊源智は、京都百万遍の知恩寺を創建した人物である。四十八巻本の『法

然上人行狀繪圖』卷第四十五など、通例は平師盛の子、重盛の孫とする。通盛の子とする説話は珍しいのではないか。但し、小宰相局が入水時に妊娠中であつたことは、『平家物語』にも見え（流布本では巻第九「小宰相身投」、人口に膾炙していたと思われる）。

平家の遺児が、法然のもとで育てられ、成長後親の遺骨を得るという筋は、『小敦盛』と一致する。また一の谷の戦いで討たれた武將の遺骨を、戦場まで拾いに行くという点も類似している。説経『こあつもり』では、敦盛の遺児が百万遍知恩寺を開いたとして源智に擬せられている。『正源明義抄』がどのような立場から書かれているかについては不明であるが、『小敦盛』との間に何らかの影響関係が存在するのである。『正源明義抄』はこの他にも例えば巻第一の六に、法然が七歳の時に弓遊びをした記事が見えるが、『小敦盛』（絵巻）も八歳の時の弓遊びがきっかけで、父母のいないのを嘆くという設定になっている。

それでは、『正源明義抄』と『小敦盛』のいずれが先行するのであるか。私は現在までのところ、これに対して明確な判断をなし得ない。『小敦盛』が影響を与えているとも考えられるが、敦盛の遺児の存在よりは、通盛の遺児の存在の方が、やや現実性があるのではないか。また、法然上人伝が『小敦盛』のような説話から影響を受けるということも、考えにくいのではないか。恐らく『小敦盛』は、現存する『正源明義抄』そのものではないにせよ、そこに見えるような法然や源智の伝の影響を受けて成立したものと考える方が妥当性が強いだろう。

三

さて、『山州名跡志』巻十一、下久世村（現、京都市南区）の項は次のような記事を載せる。¹⁶⁾

子敦盛ノ旧跡 當^三下久世ノ南寺戸ノ北^二。有^レ池其所是ナリ。傳ヘ云。此ノ地敦盛ノ室。蟄居シテ一男子誕生ノ所ナリ。然ノ後源家ヨリ平氏ノ裔類ヲ尋揚^{サガ}ヲ以テ不^レ堪^グ忍^ニシテ。一乗寺ノ下松ニ捨ツ。此地古ヘヨリ住宅スル者皆怪異ニアフユヘニ畠トナス。然レドモ實ノルコトナシ。因テ為^レ池ナリ。又池ニ米種ヲ浸スニモ無^レ芽^{メダ}ト云フ。

ここにも『小敦盛』の伝承が見られるが、洛南のこの地になぜ、右のような伝が残るのかを考えてみたい。敦盛の北の方の隠れ忍んでいた場所は、御伽文庫本『小敦盛』冒頭部に、「扱も敦盛の北の御方は都西山の傍に深く忍び給ひけるが」とある。下久世村ならば「西山の傍」と言えなくもない。しかし、他に何か手掛りはないだろうか。

同村に、迎錫山福田寺という寺がある。現在は浄土宗西山派の尼寺である。『山州名跡志』によると、この寺に梁の武帝の作と伝えられる、赤栴檀、八寸八分の摩耶夫人の立像があり、この像は皇帝が女性の平産を希願して作られたものだという。この像は日本に将来されて、摂津摩耶山の切利天寺に祀られていたが、後、この寺に移したという。摩耶山は、『小敦盛』において、敦盛の霊が現じたとする生田の地に近接する。また、嵯

峨清涼寺にも摩耶夫人に關りの深い信仰がある。弘安四年（一二八一）、清涼寺の僧顯意の作による『西郊清涼寺瑞像流記』によると同寺にある釈迦像は、釈尊が摩耶夫人を教化するため切利天に昇っている間、優填王が釈尊を恋しく思い、釈尊の弟子の目連に請うて精通力をもって切利天に栴檀の木を匠とを昇らせ、作らせた像を日本に將來したものであるという。この話は『今昔物語集』巻六の五にも載るが、そこには目連尊者の名は見えず、毗首羯磨天がこの像を作ったとしている。目連が地獄に苦しむ母を救ったという説話はあまりにも有名であり、清涼寺の母子再会譚など、女性の信仰とも關つてこのように改変されているのではないか。

美濃部重克氏が指摘しておられるように、『小敦盛』の背後には、女性の哀感を誘う、女性の信仰の側面が見出されるが、それは摩耶夫人信仰と關つて、嵯峨、下久世、生田の三つの地域を結んでいるのではないか。このように考えるならば、なぜ、清涼寺の母子再会譚が『小敦盛』と關るのかも理解し易いと思われる。

以上見てきたように、『小敦盛』は『平家物語』をもとに、さまざまな要素の寄せ集めによって成り立っているが、その中心となるのは母子再会譚と平家の遺児伝説であろう。室木弥太郎氏はこの作品を高野聖の唱導によるものとして、『こあつもり』は本来御影堂や百万遍の縁起を語るという一面を持っていたとみなければならぬ」と述べておられる。⁽²⁾しかしこの作品の成立基盤はその二箇所だけに限定されるものではないようだ。『法華経驚林拾葉抄』などの天台系の唱導との関りや、嵯峨清涼寺

及び融通念仏宗との関係、『正源明義抄』に見られるような法然上人伝からの影響など、複雑で多岐にわたる影響関係のもとに、『小敦盛』は形成されたといえよう。

四

最後に、御伽草子本文の先後関係について私見を述べておきたい。結論を先に述べると、御伽文庫本は説経・古浄瑠璃の影響を濃厚に受けた後出本文であり、絵巻の方がよりよく古態を留めていると私は考えている。このことを説明するためには、まず、敦盛説話の二系統について説明する必要がある。

金春禅鳳作と伝えられる謡曲『生田敦盛』は、世阿弥作の謡曲『敦盛』を強く意識して作られた曲である。いずれもシテである敦盛が舞を舞うのだが、前者が曲名を『生田敦盛』とするのは、その敦盛の霊が現じた地を生田とするためであり、それが須磨を舞台にする『敦盛』と大きく異なる点である。恐らく須磨と生田には別々の敦盛伝承があり、それぞれを基に、『謡曲敦盛』と『生田敦盛』は作られたのである。前者を須磨系の敦盛伝承、後者を生田系の敦盛伝承として区別する必要がある。

それでは、幸若舞曲『敦盛』はどうか。この作品では敦盛がどこで熊谷に討たれたかについて明確な記述はないが、塩屋の端を心がけ、駒にまかせて唯一騎、心ほそくも落ちられけり」とあることなどから、須磨系の敦盛伝承を基にしていると考えられる。塩屋は須磨の西側に隣接する地域であり、須磨・塩屋間に現存する、敦盛終焉の地とされる石塔の位置ともこの記述は符号する。徳田和夫氏は室町末期写の『須磨寺参詣曼荼羅』

に、この敦盛塔とおぼしき石塔が見えることを指摘しておられる。²³ 御伽草子『小敦盛』は、言うまでもなく生田系の敦盛伝承をもとにしている。絵巻の一本である早大本の書付に「生田敦盛絵巻」の名が見えるから、²⁴ もともとそのように呼ばれていた可能性もある。敦盛の遺児は、加茂明神の夢告により、「昆陽野、生田」を訪ねよと教えられる（御伽文庫本、絵巻とも）²⁵ が、このことから『小敦盛』が生田の敦盛伝承をもとにしていることは明らかである。

この須磨と生田の二系統の敦盛伝承は本来、全く相容れないものである。例えば須磨系では敦盛の遺品として「小枝」（或いは「青葉」と呼ばれる笛が重視されるが、生田系では謡曲でも絵巻でも、笛はあまり重視されていず、代って絵巻では敦盛の遺品として直垂が重視されている。

また、幸若舞曲『敦盛』は敦盛の北の方を「按擦使の大納言資賢の卿の女」とするが、資賢は『平家物語』等にも名の見える郭曲の名手であり、恐らく敦盛の遺品の笛との関係でこのような説話が生み出されたのであろう。敦盛と北の方が知り合ったのも、幸若では管絃の場である。幸若は音楽説話を増補していく傾向にある。それに対して「絵巻」は音楽と関つていかな。敦盛の北の方を、「信西の孫、弁の内侍」とするが、これは恐らく阿波弁内侍を指したものであろう。

さて、説経・古浄瑠璃の「こあつもり」は、その前半部に幸若舞曲『敦盛』の影響が認められる。しかしこれは、もともと別系統の説話を強引に結びつけたもので、かなり後出の本文と言わざるを得ない。そのため、説経・古浄瑠璃では、二段目と

三段目の間に断絶があり、高野山に登った筈の熊谷直実が再び都の法然のもとに居るといふ錯誤が起つていたのである。

御伽草子『小敦盛』の御伽文庫本と絵巻の最大の本文異同は、御伽文庫本が前半部を欠いているという点にある。御伽文庫本は、「扱も敦盛の北の御方は」といふ書き出しで始つてゐるが、それについて松本隆信氏は「このような書き出しの仕方は、やや特異な感じを与える」と指摘しておられる。²⁶ この書き出しは語りの色が濃い。また、成田守氏は御伽文庫本が「いたはしや」「むざんやな」「あら父母恋しや」等、語り物に近い表現を多く含んでいることを指摘しておられる。²⁷

以上の点から考えて、御伽文庫本は、説経・古浄瑠璃の三段目以降、後半部分が独立したものと考えられる。勿論、絵巻系の本文もまた、語りをもとにしている可能性が強いが、御伽文庫本ほどは語り物の影響は認められない。しかし、だから後出である、ということにはならないのである。絵巻のもとになった語りがあったとすると、それは幸若の影響を受けていないもので、現存の語りより古い語りであらう。そこで、順序を示すと、絵巻系本文のもとになった語りがまず存在し(1)、それをもとに絵巻が作られた(2)。そのうち、(1)の前半部に幸若舞曲を取り込んだ語りが成立し(3)、その後半部が独立したものが御伽文庫本である(4)。大略、このような成立過程を経てゐると思われる。

では、なぜ絵巻には、敦盛の遺児は成長後西山の善恵上人になつたとする結末部が存在するのだろうか。これは美濃郡重克氏が指摘するように、熊谷蓮生と宇都宮蓮生との錯誤に基くものであろうか。²⁸ そのことを考えるためには、まず、善恵坊証

空上人の事蹟を確認しておく必要がある。

善恵坊証空上人は法然の高弟の一人で、浄土宗西山派の開祖である。治承元年（一一七七）加賀権守源親李の長男として生まれ、九歳で内大臣久我通親の養子となった。十四歳のとき法然の弟子となり、以後二十三年間つねに随身している。法然の晩年から没後にかけて天台学と台密とを学び、以後西山善峰寺北尾住生院（三鈷寺）を中心に独自の浄土教学（西山義）の樹立に努め、今日の西山派の基礎を築いた人物である。宝治元年（一二四七）七十歳で没している³⁰。

さて、先にも述べたが、『小敦盛絵巻』では、敦盛の遺児は、一の谷合戦のあつた寿永三年（一一八四）又はその翌年に生れている筈だから、証空の年令とは七年内至八年の差があり、史実とは齟齬をきたしている。しかし、証空の正確な生年を知らない読者にとつては、ほぼ同世代の人物として認識される可能性があるのである。その可能性は例えば、浄土宗西山派の総本山である粟生光明寺の縁起に求めることができる。

内閣文庫蔵の元禄十六年の奥書を持つ『粟生光明寺略記』によると、光明寺は建久九年熊谷蓮生法師によって建立され、法然上人の開基となつている。このあたりの事情はわかりにくい。法然は浄土宗の開祖であるため、敬つて開基としたものらしい。『山州名跡志』巻十所収の粟生光明寺の縁起によると、法然の没後、その遺骨を管理した幸阿弥陀仏によつて、この寺が法然の廟所となつたという。そののちは、善恵上人が三鈷寺と兼住でこの寺を管理している。熊谷直実が粟生光明寺を創建したという伝承が、いつ頃から存在したかは疑わしいが、もしこ

の伝承と敦盛の遺児が証空上人になったとする伝承を重ねるならば、『小敦盛絵巻』の登場人物と粟生光明寺の創建に関する人物は、ほぼ重なることになる。

また、証空の拠つた三鈷寺はもと四宗兼学の道場であり、その開基である源算は『拾遺住生伝』によると、もとは捨て子であつたという。

あるいはまた、三鈷寺の本尊の千手観音は、賀茂社の楓の木から作られたという説話が、『元亨釈書』や御伽草子『賀茂之本』に見える。西山派と賀茂のつながりも決して薄くないのである。

これらの事情を考慮するならば、『小敦盛』が成立はともかくも、唱導の材として浄土宗西山派の内に取り込まれて語られていた可能性も、あながち否定できないのではないか。

注

- (1) 松本隆信「御伽草子本の本文について——小敦盛と横笛草子——」『斯道文庫論集』第二輯、昭和三十八年三月。『中世庶民文学』所収。
- (2) 美濃部重克「こあつもり」考」『南山国文論集』第九号、昭和六〇年三月。
- (3) 徳江元正「班女」餘響」『國語と國文学』昭和五十二年七月。『室町藝能史論』所収。
- (4) 以下引用本文は、平成三年臨川書店刊の影印（永井義憲解題）に拠り、私に句読点を施した。
- (5) 前掲(4)、解題。
- (6) 香西精「作者と本説 百万」『観世』昭和三十六年四月。『能謡新考』所収。
- (7) 田代尚光「融通念仏縁起の研究」(昭和五十一年、名著出版刊)に拠る。
- (8) 細川涼一「導御・嵯峨清涼寺融通大念仏会・百万」『文学』昭和

六一年三月)

(9) 大覚寺資料編纂室編『大覚寺文書』上(昭和五五年大覚寺発行)に拠る。

(10) 日本古典文学大系『御伽草子』(市古貞次校注、昭和三年、岩波書店刊)

(11) 新潮日本古典集成『御伽草子集』(松本隆信校注、昭和五五年、新潮社刊)

(12) 前掲(2)論文。

(13) 『国書総目録』に拠ると、室町中期の写本が滋賀県福田寺に蔵されているようであるが、未見。他に古写本としては龍谷大学と大阪本泉寺に室町末の写本がある。

(14) 以下引用本文は、国文学研究資料館蔵の承応二年版本に拠り、私に句読点、濁点を施した。

(15) 『説経正本集』第三(昭和四十三年、角川書店刊)所収、鱗形屋板他。

(16) 以下引用本文は、『新修京都叢書』第十八卷(昭和四二年、光彩社刊)に拠る。

(17) 引用は前掲(10)に拠る

(18) 『雍州府志』巻五は、「今、浄土宗にして知恩寺に属す」とするが、もとは天台宗の寺であったようであり、室町期において何宗であったかは不明。

(19) 『書陵部紀要』第二五号(昭和四八年)所収の翻刻を参照した。

(20) 前掲(2)論文。

(21) 室木弥太郎『語り物の研究』(昭和四五年、風間書房刊)二八四頁～二九四頁。

(22) 『幸若舞』3(昭和五八年、平凡社東洋文庫)に拠る。

(23) 徳田和夫「中世の目、中世の耳——社寺参詣曼荼羅の芸能素序章——」(『國文學』昭和六十二年六月)

(24) 『軍記物とその周辺』(昭和四十四年、早稲田大学出版部)

(25) 成田守「『子敦盛』の生成」(『大東文化大学紀要』17、昭和五四年)前掲(1)論文。

(26) 前掲(5)論文。

(27) 私とは若干見解が異なるが、藤掛和美氏も「『波川版御伽草子』『小敦盛』の位相——敦盛譚・小敦盛譚の系譜より——」(『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』昭和五九年三月。『室町期物語の近世

的展開』所収)において、「御伽文庫本」を下限に位置づけておられる。

(29) 前掲(2)論文。
(30) 大日本史料 五ノ二三、他

(さや まきと)